

スペシャルコラム

アイルランドからきた ピーターさん

Part. 4 (最終回)



日本とアイルランドはともにユーラシア大陸の東西両端に位置する島国として、古くから文明を育んできた。地理的には対極に位置するにもかかわらず、いくつか不思議な共通点がある。たとえば、日本には古来八百万の神が住まうが、古代のアイルランド人たちも至るところに神が宿っていると考えていた。日本の古典文学は文化的なものを大切にする「たおやかさ」に満ちているが、アイルランドの古典文学もまた同様の精神性に支えられている。松江にゆかりの深い小泉八雲もアイルランドで過ごした幼少期に、日本の説話に親しむ素地を培ったと言われている。

アイルランドには幽霊や妖精の伝承が数多く残っている。その中の一人、レプラコーンという小さな妖精は、虹のたもとに金の壺を隠しているとされ

る。アイルランドでは、夏の晴れた日にわか雨のあと虹が出ることが多い。しばしば二重の虹も出る。子どもの頃、私はレプラコーンに会うために、虹が地面と接するところめがけて走って行ったものだった。しかし、近づいたと思ったら虹は消えてしまい、金の壺を手に入れることはできなかった。

それから、『浦島太郎』によく似た、オシーンとニアヴの物語もある。この物語では、人間の英雄であるオシーンと異界の女性であるニアヴが恋に落ちる。オシーンは水上を移動できるとい魔法の馬に乗って海を渡り、ティル・ナ・ノグと呼ばれる楽園にあるニアヴの宮殿に向かう。しかし、3年ほどすると、オシーンは徐々にホームシックを募らせていく。ニアヴは帰郷を渋々認めるが、決して魔法の馬から降りたり、地面に触れたりしないよ

うにと警告する。オシーンは無事アイルランドに戻ることができたが、300年の歳月が流れていることに呆然とする。そして、魔法の馬から転落し、瞬く間に300歳を超える老人となった彼は、老衰で亡くなってしまう。

『浦島太郎』には、浦島太郎が竜宮城で過ごしている間に300年が経っていたというバージョンもあり、主人公が亀や馬に乗り、海を渡って旅をするという点においてもこの二つの物語は重なる。私もとても長い時間を日本で過ごしているため、馬に乗ってアイルランドに帰れば、一瞬で死んでしまうかもしれない。それはともかくとして、アイルランドと日本が文化面で通じ合っていることは喜ばしい。

私はアイルランドの人々がもっと益田に来て、美しい山や海の景色を眺め、神社や庭を訪れてほしいと思っている。益田の人々にもアイルランドを訪れてほしい。アイルランド人は気さくで話好きなので、すぐに仲良くなれるはずだ。そしてもし、幸運にも虹を見たら、私が見つかることのできなかった金の壺を探し当ててほしい。見つめられたときには、私にも分け前の代わりにお土産をどうかお忘れなく。

皆さんの旅路を神々と妖精が末永く見守ってくださることをお祈りして、私のアイルランド案内のしめくりとしたい。

問 市観光交流課 ☎ 31-0106



翻訳家・版画家・詩人

ピーター・J・マクミラン

アイルランド生まれ。アイルランド国立大学ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンを首席で卒業後、同大学院で哲学の修士号、米国で英文学の博士号を取得。プリンストン、コロンビア、オックスフォードの各大学で客員研究員を務める。渡日後は杏林大学教授、東京女子大学講師を歴任。現在は相模女子大学客員教授・東京大学非常勤講師を務める。2008年に英訳『百人一首』を出版し、日米で翻訳賞を受賞。2016年に英訳『伊勢物語』、2018年に『百人一首』の新訳を出版。また、アーティストとして「西斎」名義で版画制作活動を行っている。日本での著書に『日本の古典を英語で読む』『松尾芭蕉を旅する』など多数。朝日新聞で「星の林に」、京都新聞で「古典を楽しむ」を連載中。

益田市は、東京2020パラリンピックでのアイルランドサイクリングチームの事前キャンプ受入れを契機にアイルランドとの交流を進めています。スペシャルコラム『アイルランドからきたピーターさん』では、アイルランド出身で益田市ともご縁のあるピーター・J・マクミランさんのコラムを全4回にわたってお届けしてきましたが、今回が最終回となります。ご愛読ありがとうございました。